コメント一

加藤久子

一、近代国家における政教関係

本シンポジウムでバラエティに富んだ報告を拝聴し、各国の政教関係が実に多様であることに思いをはせている。多くの近代国家が公的領域における政教分離を国是としつつも、その「分離」の有りようが多様であるのは、それが一九世紀から二〇世紀初頭の近代国民国家の成立過程で、それ以前からあった社会的資源を活用しつつ、政教間での対立、弾圧と恭順、抵抗、交渉や妥協、融和などさまざまなプロセスを経てできあがったものだからである。

また、「政治」の領域の内部にも世界観や人間観に関わる様々な価値の体系（コード）が網の目のように張り巡らされている。趣旨説明にもあったとおり、ナショナリズムはまさにこういう種類のものと考えられるため、本日の三報告が、ナショナリズムの内部における多様性・多面性を明らかにしたことには大きな意義があると言えるだろう。

二、キリスト教の構築性

これを踏まえて、（言い古された表現ではあるが）キリスト教の構築性について考えてみたい。絶大なる権威・権力として存在したと考えられている中世キリスト教について、バーガー＆ルックマンは、「キリスト教的伝統の独占的保護者であった教会は、極めて弾力性に富んだやり方で、さまざまな民間信仰や習慣を、それがキリスト教世界そのものに対する明確で異端的な異議申し立てに結晶化しないかぎりは、その伝統のなかに統合していった。たとえば農民たちが先祖伝来の神々からある一人を選び出し、それを

コメント（加藤）

キリスト教の聖者に〈洗礼〉し、しかも従来通り伝来の説話を語りつづけ、伝来の祝祭をこの聖者に結びつけて祝いつづけたとしても、それはなんら問題にはならなかった」と説明する。キリスト教はローカライズしながら、世界的に拡大していったということになる。

キリスト教が、それぞれの時代や場所に適応することで生き延びてきたとすれば、近代はキリスト教がナショナリゼーションを経験した時代と言うことができる。これは必ずしもキリスト教がナショナリズムに動員されたという意味ではなく、ナショナライズされる世界にさまざまな方法で適応していくプロセスとして理解することができる。

村田報告では、ギリシャにおける正教徒のアイデンティティの多様性が示された。また、トルコとギリシャの間で揺れる世界総主教座の姿も印象的に描き出された。この事例からは、「教会（組織）」も国家の枠組みと折り合いをつけなければ生き延びることができない「近代」という時代の特性を垣間見ることができる。

また、井出報告においては、ハンガリーにおけるスロヴァキア語話者にとっての小教区社会（コミュニティ）の重要性が指摘された。これは現代の移民コミュニティにおいても見られる現象であるが、移住者やマイノリティのナショナリズムがどのように規定されており、それがアイデンティティ形成にどの程度影響を与えているのかについても関心を持った。

この二つの事例からは、アイデンティティを規定する際、言語・宗教・出生地など、何に重点が置かれるかは状況によって異なり、眼前にある彼我の差異が資源として利用されるという側面があるようにも感じた。

大澤報告によっては、逆説的に「西欧型キリスト教」というカテゴリーを想起させられた。一般にキリスト教と理解されているものはヨーロッパの地域文化の反照にすぎないのではないかということである。事例として取り上げられた「アフリカ人のナショナリズム」については、これを可能にしたものは何か（時代性、権力関係、教派の特徴など）という点についても想像力をかき立てられた。

三、まとめ

三報告とも一般市民の視点からの記述が分析を対象にしており、ナショナリズムの多様性は見事に示されていた。他方で、トランスナショナルなナショナリズム、ローカルなナショナリズムなどの事例も出てくる中で、なおもそれをナショナリズムと呼ぶことの意義について再考していく必要性を受け止めている。

参考文献

ピーター・バーガー&トマス・ルックマン『現実の社会的構成』（新曜社、一九七七年）、一八四～一八五頁。

加藤久子「現代史における宗教研究の可能性と課題―ポーランド史の視点から」東欧史研究会『東欧史研究』第四〇号、二〇一八年、一六五～一七〇頁。

（國學院大學　研究開発推進機構　客員研究員）